

意識は眼球に宿る、あるいは江戸時代の眼球譚

副田一穂（愛知県美術館学芸員）

———視覚によってわれわれは太陽や星に触れ、われわれはいたるところに、手近な物のもとにも遠い物のもとにも同時にいるのだ¹

かなり単純化していることを承知で言えば、ルネサンスおよび科学革命以降支配的であった視覚の制度、つまりデカルト的な遠近法主義は、眼が肉体に殆ど埋没しながら絶えずきよろきよろと動き回る器官であることを忘れて、カメラ・オブスキュラにあげられた小さな穴のように固定された数学的な点に眼を還元した。眼は光を通してスクリーンに投影する精巧な装置であり、その内側で意識が投影像を観察する。この意識は人間の肉体からも世界からも切り離されて自律した存在であった。視覚と意識との関係はこのように理解されていたし、17世紀初めに発明された望遠鏡もまた、肉体を欠いた認識主体という図式を補強する視覚補助装置とみなされてきた。そして、わたしたちを肉体や世界から切り離す単一にして不動の点に固定されていたこの眼球は、18世紀後半から19世紀前半にかけて、網膜残像や両眼視差などわたしたちの眼に特有の生理学的な経験の研究を通じて、再び肉体へ埋め込まれてゆく²。視覚は肉体のなかで展開するプロセスとみなされ、それに伴って知覚や認識の主体としての意識もまた、肉体に条件付けられたものへと変容していった。

*

笑福亭里光が演じる「善兵衛の目玉（宇宙編）」は、2010年に奥村雄樹が個展のために里光に依頼してつくられた創作落語を、本展開催にあたって再構成したものである。話の骨子は、1975年から1994年にかけて製作されたテレビアニメシリーズ『まんが日本昔ばなし』のうち、1982年放映の「善兵衛ばなし」に取材したもので、奥村は幼少期にこの作品を観て、荒唐無稽なはずのストーリーが自らの身体感覚と照合して腑に落ちてしまうという体験に衝撃を受けたと語っている³。「善兵衛ばなし」のタイトル画面には出典に愛媛県と記されており、おそらく南予地方に伝わるホラ話「目玉をとんびにさらわれた話」に基づいている。少し長い話の前半を引用しよう。

城辺の緑の奥の山さんざえもん左衛門という男が、宇和島の和霊様祭りに行きよったところが、

¹ モーリス・メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄訳、みすず書房、1966、p. 296.

² ジョナサン・クレーリー『叢書 近代を測量する 1 観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』遠藤知巳訳、十月社、1997.

³ 「奥村雄樹 くうそうかいぼうがく・落語編 プレスリリース」MISAKO & ROSEN, 2010.

何やら黒山の人だかりがしてわあわあとさわぎよる。何じゃろかと思つて行て見たが、何さまあんまり人が大勢で、サッパリ中を見ることが出来ん。ひょっと思いついて、右の眼玉をはずしてちょうど洋傘を持つとったもんじゃけん、その先に目玉をつけて、うんとこさとさし上げて見たら、見えるわ、見えるわ、今牛の突き合いの真最中よ、山やん大喜びで見よったところが、この人だかりの上で輪を描いて遊びよった鳶が、洋傘の先の眼玉をくわえたなりスーッと飛んでいてしもうた⁴

アニメ化にあたって主人公の名が「山左衛門」から「善兵衛」へ変更された経緯は不明だが、この「善兵衛」という名が奥村をもう一人の善兵衛、岩橋善兵衛に引き合わせるようになった。18世紀末に望遠鏡を国産化したことで知られる岩橋善兵衛嘉孝（1756-1811）は、和泉国貝塚の人で、家業の玉磨きの技術を応用して望遠鏡の量産に成功した。それまで幕府や一部の大名しか手にすることのできなかった望遠鏡の国産・量産化が、当時の視覚文化に多大な影響を及ぼしたことは想像に難くない⁵。善兵衛の知己、橋南谿は邸宅での天体観測会に善兵衛作の望遠鏡を用いてその性能を高く評価しており⁶、また皆川淇園は桃山の梅園散策の折に、同行した画家・円山応挙が持参した望遠鏡を代わる代わる覗いたという記録を残している⁷。まさに18世紀末は、望遠鏡や顕微鏡といった器具の充実、そして宝暦から天明にかけての蘭学の奨励などによって、天体や小さな生き物、雪の結晶、体内といった、これまで視ることのできなかった世界が可視化された時代であった。

望遠鏡は、眼球と世界とのあいだに位置する媒体であり、レンズを通して視覚を拡張する道具である。しかし、人々は望遠鏡による視覚を、光学的な機巧によって拡張されたものという遠近法的思考で実感していたわけではない。「遠目鏡自慢ハもとへ目かもどる」や「絶景を取り寄せて見る遠眼鏡」といった、望遠鏡による視覚体験が詠まれた当時の川柳からは、望遠鏡が視覚を、ひいては眼球そのものを遠方へと投げ出す仕掛け、さらには遠景を目元に手繰り寄せる仕掛けとみなす感覚が窺える。つまり、望遠鏡の細長い筒の中で生じているのは、視覚の光学的な拡張などではなく、むしろ眼球もしくは世界の、物理的な移動なのである。

ところで、「善兵衛の目玉」との類比を誘う古典落語「犬の目」の元となった小話「眼玉」もまた、18世紀後半に刊行されている⁸。自分の目の代わりに犬の目を嵌め込んだ男が犬化してし

⁴ 『愛媛県史概説』下巻、愛媛県、1960、p. 451.

⁵ 望遠鏡製作のための素材や交流のあった職人、学者、文人たちを記した岩橋家に伝わる文書『仕入方直段扣帳』には、大阪の文人・木村蒹葭堂（1736-1802）や京の儒医・橋南谿（1753-1805）、同じく京の儒者・皆川淇園（1735-1807）など錚々たる顔ぶれが挙がり、京・大阪の文人サークルのあいだに善兵衛の望遠鏡が出回っていた可能性が高い。

⁶ 橋南谿『望遠鏡観諸曜記』、1793.

⁷ 皆川淇園『淇園文集』初編卷之二、1799.

⁸ 小松屋百亀『聞上手』、1773.

まうこの物語には、眼球の移動に意識が随伴してしまうという感覚が描かれている。知覚や認識の主体は、眼球からの情報を遠隔地で監視するのではなく、眼球そのものに乗れ込んで移動しているのだ。「善兵衛の目玉」において、眼球はまるで帰投するスペースシャトルのように熱を帯びながら地表に落下し、その熱は地表で帰宅の途上にある善兵衛の肉体を焦がす。眼球はもはや視覚に留まらず五感全ての媒体に変容している。意識と肉体の二元論を超えて、眼球と私自身とは等号で結ばれる。そして、再び善兵衛の肉体に戻った眼球を基点に、肉体の外側と内側とが裏返る。

*

光情報が網膜で神経信号に変換され視神経を通じて脳に伝達されるという解剖学的知見に反する善兵衛の意識を、善兵衛から 200 年後を生きるわたしたちは、今なおありありと思いつくことができる。それも、磨かれたレンズ越しにではなく、落語家の不透明な肉体、そこに宿る善兵衛の肉体、さらにそこから遊離した善兵衛の意識へと、幾重にも不透明な膜を貫いて、わたしたちは善兵衛の目玉に乗り込み、そして世界を自らの眼球の内に手繰り寄せる。いや、所作と語りだけで物語を進行させるこの落語という形式だからこそ、映像的再現が困難な身体構造を生き活きと描き出すことができるのだ。そのとき、知識によって編み上げられた解剖学とは別に、奥村の言う「空想解剖学」、現実の世界と肉体を生きる経験に基づく解剖学を、わたしたちは学び始めているだろう。